



目次

巻頭エッセイ

- 2 ひとしづく
水辺は人の故郷 加藤登紀子

特集 水が語る佐渡

- 6 概論1
佐渡が示す人と自然の共生モデル 五十嵐敬喜

- 8 ジオ
二つの島がつながった金の島

- 10 鉱山
「排水」と「水利」から見る佐渡金銀山
—— 400年続いた鉱脈の残影 相川金銀山

- 15 文化的景観
佐渡最初の鉱山を繁栄させた「水」
西三川砂金山

- 18 棚田
江戸期の記憶留める棚田 岩首昇竜棚田
コラム 金銀山を支えた鉱山水利と食糧増産

- 20 伝統芸能
海を越え、育まれた芸能

- 22 北前船
廻船の歴史伝える濃密な空間 宿根木・小木港
コラム 宿根木の海に浮かぶ昔ながらの「たらい舟」

- 28 概論2
恵みを活かして「自立の島」へ
—— 佐渡の未来への提言 鈴木基之

- 30 生物多様性
トキよ、よみがえれ！—— 生きものひしめく共生の田んぼ
コラム なぜ佐渡の里山は世界農業遺産に認定されたか

- 35 文化をつくる
水の恵みと可能性に満ちた島 編集部

佐渡の概要

人口は55,331人、世帯数は23,909世帯(2019年1月1日現在)。面積は約855.61km²(東京23区の約1.5倍)。夏は高温多湿だが、冬は対馬暖流の影響で比較的温暖で降雪量も少ない。平均年間降水量も全国平均をやや下回る。歴史は古く、2万年から1万7000年前ごろの遺跡も発掘されている。また、金銀の産出で知られ、江戸時代は幕府の天領で大がかりな開発が行なわれ、17世紀には世界最大の産出量だったといわれる。現在の農業は米が中心で、約65万人分相当を生産。柿などの果樹栽培、干しいたげづくりも盛ん。漁業ではイカやブリが知られる。日本酒の蔵元も多い。2004年(平成16)年に、両津市、相川町、佐和田町、金井町、新穂村、畑野町、真野町、小木町、羽茂町および赤泊村の1市7町2村が合併し、佐渡島全体が佐渡市となった。年間の観光客数は50万人(2016年)。

※佐渡島は「佐渡」と表記する。ただし、「」内はそのときの発言に従った

連載

- 36 水の文化書誌51
ドナウ川—— 黒い森から黒海まで 古賀邦雄
- 38 魅力づくりの教え12
暮らしながら守る文化財
島根県大田市大森町 中庭光彦
- 42 食の風土記13
舟運と文化の蓄積がもたらした こづゆ 福島県会津若松市
- 45 Go! Go! 109水系16
夢を抱いた人々の開拓軸 後志利別川 坂本貴啓
- 50 センター活動報告
- 51 編集後記／ご案内
(敬称略)

特集

水が語る佐渡

古来、「金の島」として知られる佐渡。日本海に浮かぶこの島は、金銀はもちろんのこと、鉱山技術を応用した水利による稲作および水の力(北前船)で運び出された産品によって隆盛を誇った。

金銀山の閉山・休山で基幹産業を失っても人々は暮らしつつ、今ではトキをシンボルとするブランド米で持続可能な農業を目指している。

日本の縮図ともいわれる佐渡の歴史を「水」の視点から見つめ、「人と自然の共生」のあり方や、私たちがこれから大事にすべきものを探った。

加茂湖から大佐渡山地を望む。加茂湖はもともと淡水湖だったが、湖水の氾濫を防ぐため明治期に開削し、両津湾とつながり汽水湖となった